



Contents

- ❖日本人特有の美意識～余白と間～
- ❖『大東文化大学百年史』上巻への反響、中・下巻刊行に向けて
- ❖書幅「A級戦犯二十一名寄せ書き」
- ❖『大東文化大学百年史 上』刊行記念講演会
および「全国大学史資料協議会東日本部会研究会」が
本学で開催されました。
- ❖百年史編纂の現場から
- ❖大東アーカイブス活動記録

『資治通鑑』有志輪読会(昭和6年3月)

草創期より大東文化学院には多くの「輪読会」(研究会)が存在した。上下の隔てなく互いに意見を交わす「輪講」「輪読」は、大東文化学院において最も重視された勉強法であった。同時期には他に、『老子』『春秋左氏伝』『経学史』等の研究会が存在した。『資治通鑑』は中国北宋時代の歴史家である司馬光が、五代皇帝英宗の命を受けて編纂したもので、1065年から1084年までおよそ20年をかけ編まれ、神宗に進呈された。全294巻からなる編年体の歴史書は、東洋史学を専攻するうえで欠かせない文献である。

Daito Archives
Newsletter

大東文化歴史資料館
ニューズレター
エクス・オリエンテ

Vol.

36

Ex Oriente

日本人特有の美意識

～余白と間～



大東文化大学副学長

河内利治(君平) (文学部書道学科教授)

21_21 DESIGN SIGHT企画展「もし イメージ Graphic展」に、松田行正製作「かな誕生」という大きなパネルが展示された。その巻頭に次のように書かれている。

——余白とは、空間にリズムを感じることであり、何もないところに周囲とは違う熱量を感じることで想像力が刺激される空間のことである。日本文化の特徴の一つがこの余白・余情の美学。これは「描きつくさない」ことで描かれた以上のものを創造させる表現力のことである。こうした表現力を培うことができた要因の一つを日本語の字体ではないかと私は見ている。日本語とは表記する場合、中国から伝来した漢字、その漢字の扁・旁をアレンジしたカタカナ、漢字を草書化してつくったひらがな、そして現代では欧文もそのまま文章中に入れるなど多重書体を使う言語である。(『もし イメージ Graphic』株式会社グラフィック社、2023年、19頁)

リズムを感じ、熱量を感じ、想像力が刺激される空間、との「余白」の定義には一理ある。現代日本のグラフィックデザイナーは、「日本文化の特徴の一つがこの余白・余情の美学」であるまでという。「描きつくさない」ことで描かれた以上のものを創造させる表現力は、「余白・余情の美学」の別の謂であろう。日本人の美意識は、「余情」を伴う「余白」に「美」を見出そうとする傾向にあると考えているが、これはひょっとすると日本人特有の美意識ではなからうか。「余情」を伴わないモノには見向きもしないからである。日本人が看取する「余情」は、中国人の「余韻」に通じるのではないか。抒情性を重んじる日本人と論理性を重んじる中国人の対比が、この「余情」と「余韻」という微妙な言葉の相違に潜んでいるように思われてならない。人間は、視覚を通してモノを見る。それが「もし」(書かれた・打たれたあらゆるモノを含む)の場合、日本人は、「もし」を含む全体としての「想像力が刺激される空間」に心打たれ、直截に受けた刺激を自分のものにしようと「余情」に趣くのではなからうか。決して理的・哲学的に解釈しようとはせず、一途に余情を感受する。この場合の「空間」がまさしく「余白」であると考えられる。

日本の美を語るときに、「余白」とともによく用いられる言葉に「間(ま)」があり、すでに多くの研究者が言及している。日本語では、間抜け、間が良い(悪い)、間に合う(合わない)、間合いを量るなどと、時間にも空間にも用いる。一方、「余白」といえば、必ずといってよいほど引き合いに出されるのが、日

本画(水墨画)では安土桃山時代から江戸時代初期にかけての絵師・長谷川等伯の「松林図屏風」であり、書では伝小野道風の子筆「継色紙」である。日本の書画の「余白」は、書や画の線と線とのあいだの「間」(モノに挟まれた内側)であり、何か書かれている(描かれている)部分と何も書かれていない(描かれていない)部分とのあいだの「間」(場の間隔)であり、その書かれている(描かれている)部分と書かれていない(描かれていない)部分とが相互に浸入しあい(相入)、その相入に余情を感じるのではないか。日本の書(特に古筆)は白と黒が判然と分たれるが、日本画(水墨画)は墨のカスレや濃淡によって白黒が「融解」し、より一層「余情」を感じやすいと考えられる。

この「間」について、イラストレーター・わたせせいぞう(1945-)の「余白の宇宙」と題した小気味よい文章がある。

——「間(ま)」という漢字がある。辞書には日本の芸能で言葉、音、動作の間隔、とある。しかし僕は、絵画、彫刻、工芸、音楽、文学においても、要のファクターであると思う。まさに「間」は日本の芸術であり、文化である。(中略)書は墨の黒と紙の白とのバランスであり、私も常々いかに白を美しく見せるかに気を配っている。「余白に何が含まれているかを見せたい、魅力は隠している余白にあり」とは確かに名言である。「宇宙」には何が潜んでいるか分からないし、それゆえいくら科学が進歩しても人類は永遠に魅力を感じるのであろう。書も宇宙である。(2010年4月14日(水)朝日新聞夕刊2面掲載)

わたせ氏は「「間」は日本の芸術であり、文化である」という。この指摘は松田氏の「日本文化の特徴の一つがこの余白・余情の美学」というのと通底する。タイトルの「余白の宇宙」は末尾の「書も宇宙である」から名づけられたと推察するが、「余白」が無限大の広がりを持つことに依るのであろう。至言である。わたせ氏や松田氏の文章を紹介したのは、彼らがグラフィックデザイナーやイラストレーターといった書画を専門とする人物ではないからである。殊に書画を非専門とする方たちが、「余白」や「間」を「日本の芸術・文化」として捉えていることは極めて貴重である。昨今、ネット情報は溢れかえっているかもしれないが、書画の非専門家による文章を拝読し、意見や提言を拝聴する機会が少なくなっている。「余白」や「間」といったことばに見られる日本の美、及び日本人の美意識を媒介とする「日本の書の美学」の構築の必要性を痛感している。

『大東文化大学百年史』上巻への反響、 中・下巻刊行に向けて

百年史編纂委員会委員長

中村宗悦（歴史資料館館長・社会経済学科教授）

すでに大学は創立101年目に入り、次の目標に向けて研究・教育・社会貢献などさまざまな活動がおこなわれているところですが、『大東文化大学百年史』全三巻の完結は、まだ道半ばと言って良いでしょう。前号で「皆さま方からのご叱正を賜ればありがたく思います」と申し上げましたが、上巻刊行以来今日まで多くのご意見やご感想などを頂戴しており、百年史編纂委員会委員一同、大変励まされておりますとともに、一層気を引き締めて中・下巻の刊行準備を進めていかねばならないと気持ちを新たにしているところです。

そのようななか、すでに公開中のPDF版^(※)をお読みくださった専門家の方からのご感想なども頂戴しましたので、その一部をご紹介したいと思います。ご紹介するのは、中国の名門大学である清華大学日本研究センターでご研究をされているK先生からのものです。K先生は、斯文会と近代中国との関係のご研究で博士号を取得されており、現在も漢学振興運動を中国の近代化との関連でご研究を継続されています。斯文会とは、1918（大正7）年に漢学復興を目指して設立された教化団体で、中国の近代化において重要な役割をはたした康有為との関係も注目されています。また現在でも公益財団法人として史跡湯島聖堂の管理のほか、各種の文化活動・出版活動をおこなっています。

K先生によれば、かつての『大東文化大学五十年史』や『七十年史』では、漢学振興運動における斯文会と東洋文化協会の功績にはほとんど触れられておらず、今回の『百年史』上巻はその欠を埋めるものとなっている、その意味で「正本清源」（抜本的に問題を突き詰めること）といっても過言ではない、とのことでした。

このように過分なお褒めの言葉を頂戴し、執筆者はじめ一同恐縮しているところですが、百年史の準備を始めるに当たって、単に大東文化大学の歴史を書くのではなく、日本の近現代史研究の発展に資するものを作りたいという目標に少しでも近づけたのではないかと考えています。

さて、現在刊行に向けて準備中の中巻は、今夏の入稿に向けて着々と進んでいるところです。出版社は上巻と同じ株式会社ぎょうせいの予定で、今年度内の刊行を目指しています。同時に下巻の構成や内容もほぼ固まってきました。中巻の内容については、前回ここでも紹介しましたので、今回は下巻の構想をご紹介しますと思います。

下巻が扱う時期は、1980年代末から2023年までのおおよそ30年余です。元号で言えば、昭和の終わりから平成の全期間、そして令和に至る時期に当たります。この間、本学は学部・学科の再編成、新学部・学科の創設、板橋・東松山両キャンパスの整備などをおこなってきました。18歳人口の大幅な減少による受験者減少に対応するため数々の入試改革もおこなってきました。また、2008年には「中期経営計画」（CROSSING 2023）が策定され、2014年の「DAITO Vision 2023」を経て、現在の中長期計画である「DAITO Vision 2033」（2022年、理事会承認）へとつながっています。下巻は、このように変容を続けている大学の様子を、日本社会の構造変化と合わせてみていくことを構想しています。歴史と言うにはまだまだ日の浅い時代の叙述ですので扱いが難しいのですが、可能な限り後世への橋渡しができるように心がけていきたいと思っています。

なお、下巻が扱う時期（1980年代以降から現在まで）に大学に在籍されていた同窓生の皆さまや教職員OBOGの皆さまからの情報や資料提供も大歓迎です。もし当時の思い出の品などがお手元にございましたら、100周年記念事業推進室内大東文化歴史資料館事務担当までご一報いただけましたら幸いです（連絡先は下記の通り）。また下巻には「附録」としてさまざまなデータなども掲載していきたいと思っています。基本は『学園の現況』各年度版などに掲載されているものを主としながら整理していく予定ですが、ほかにもアイデアなどがございましたら、是非お寄せください。

最後に大東文化大学史研究紀要編集委員会では『大東文化大学史研究紀要』第9号掲載の論文等を募集しています。大学史に関するご研究の発表、資料のご紹介などございましたら是非奮ってご投稿をいただきますよう、お願い申し上げます。ご投稿に関するご質問などに関しましても100周年記念事業推進室内大東文化歴史資料館事務担当までお知らせください。

※『大東文化大学百年史』上巻のPDFデータ

<https://www.daito.ac.jp/100th/publications/07.html>

大東文化歴史資料館事務室

（100周年記念事業推進室内）

電話 / 03-5399-7403 FAX / 03-5399-7391

archives@ic.daito.ac.jp

書幅『A級戦犯二十一名寄せ書き』

大東文化大学板橋図書館に所蔵される巻物で、昨年度、同図書館長である宮瀧交二歴史文化学科教授が発見し購入したものです。東京裁判で起訴された28名のうち21名がまとめて「寄せ書き」をしている極めて稀少な資料となります。揮毫を寄せた1人には大東文化学院初代総長をつとめた平沼騏一郎の書も含まれていました。

本資料は、第二次大戦後の極東国際軍事裁判（東京裁判）で起訴され、巣鴨拘置所（巣鴨プリズン）に収容されたA級戦犯28名のうち、21名が署名とともに揮毫した「寄せ書き」を巻物としたものである。このなかで「昭和戊子年春」と星野直樹が書いていることから、揮毫は1948（昭和23）年の正月のことであろう。巻物に加工したのは後年になってからのことと思われ、本紙冒頭に「昭和癸巳夏日」と記されているため、巻物を作成したのは1953（昭和28）年夏頃と推察される。台紙は縦約350mm、横約3,250mmとなっており、その上に貼られた長い本紙に毛筆で書かれている。

巣鴨拘置所に収容されていた当時、看守などを含む米軍関係者や面会者らがA級戦犯たちに揮毫や署名を求めることが度々あり、それぞれ時に求めに応じて好みの漢詩の一節などを揮毫することがあった。ただし、起訴された者20人以上がまとめて寄せ書きを残した例は多くはなく、本資料はかなり貴重なものである。なお、この「寄せ書き」が誰に贈られたものであるか、また誰が巻物に作成したのかは不詳である。

寄せ書きは順に、平沼騏一郎、荒木貞夫、土肥原賢二、大島浩、岡恵純、東條英機、木村兵太郎、広田弘毅、武藤章、星野直樹、南次郎、小磯国昭、松井石根、橋本欣五郎、鈴木貞一、賀屋興宣、木戸幸一、佐藤賢了、重光葵、板垣征四郎、嶋田繁太郎の名が連ねられている。

彼らが巣鴨拘置所に入所したのは1945年から46年にかけてで、1946年5月より東京裁判が開始され、判決が下されたのは1948年11月のことであった。A級戦犯としての逮捕者は第一次から第四次まで100名余りとなり、そのうちから自殺者も出たが、実際に起訴されたのは28名であった。このうち病死が2名、大川周明は精神異常が認められ訴追免除となったため、判決を受けたのは25名となった。揮毫者の21名はこの25名に含まれる。判決において絞首刑（死刑）となったのは板垣征四郎、木村兵太郎、東條英機、土肥原賢二、広田弘毅、松井石根、武藤章の7名で、1948年12月23日に刑が執行された。終身禁錮刑は16名、荒木貞夫、梅津美治郎、大島浩、岡敬純、賀屋興宣、木戸幸一、小磯国昭、佐藤賢了、嶋田繁太郎、白鳥敏夫、鈴木貞一、橋本欣五郎、畑俊六、平沼騏一郎、星野直樹、南次郎、有期禁錮刑は東郷茂徳と重光葵の2名で、それぞれ20年と



7年であった。このうち、梅津美治郎、白鳥敏夫、畑俊六、東郷茂徳の揮毫が本資料中に含まれなかったことになる。

寄せ書きの最初にある平沼騏一郎の揮毫の文字は、「物皆春」。春が訪れたこと、新春の喜びを指す言葉で、万物は皆春なり、つまりは新年おめでとうという意味である。敗戦から3年目のお正月に選んだ三文字は、平沼らしい書であった。

平沼騏一郎（1867-1952）は、東京帝国大学法科大学を卒業すると司法省に入省、検事総長などをつとめた後、1923（大正12）年に第二次山本内閣に司法大臣として入閣、1924年に枢密顧問官、1936（昭和11）年に枢密院議長、1939年には第35代内閣総理大臣に就任した。司法界と枢密院に多大な影響力を持った一方、この間には大東文化学院初代総長、大東文化協会第三代会頭などを歴任し教育活動にも積極的に関わっている。保守的な政治姿勢を貫くとともに国粋主義者、皇国主義者として知られ、敗戦後、東京裁判においてA級戦犯として終身禁錮刑に処されるが、1952年6月に病気のため釈放され慶應義塾病院へ入院するも、同年8月に病死した。

『大東文化大学百年史 上』刊行記念講演会」 および 「全国大学史資料協議会東日本部会研究会」 が開催されました。



2023年12月9日（土）、本学板橋校舎多目的ホールにて「『大東文化大学百年史 上』刊行記念講演会」が開催されました。

理事長挨拶の後、中村宗悦（大東文化大学百年史編纂委員長・経済学部教授）「百年史編纂について」、浅沼薫奈（同編纂委員・東洋研究所特任准教授）「『百年史 上』が目指したもの」、谷本宗生（同編纂副委員長・東洋研究所特任教授）「『百年史 中』の展望と執筆概略について」の順で記念講演が行われました。

中村委員長からは、百年史編纂事業の立ち上げ、編纂委員会の発足、基本方針の決定などが語られました。

浅沼委員からは、上巻の基本構成、既刊沿革史との相違、掲載資料の選別方針とその特徴などが語られました。

谷本委員からは、2024年度中に刊行予定となる中巻の具体的な内容や資料の特徴などについてが語られました。

最後に学長の挨拶を以て講演会は盛会のうちに閉会となりましたが、終了後も参加者からは多くの感想が寄せられ、登壇者との懇談が行われました。参加者のみなさまと直接お話をさせていただいた一方、参加者にお書きいただいたアンケートからは忌憚のないご意見を多数お寄せいただきました。この場を借りて、ご参加いただいたみなさまにあらためて御礼申し上げます。

2024年3月14日（木）、本学板橋校舎3号館において、全国大学史資料協議会東日本部会第137回研究会が開催されました。小紫智弘100周年記念事業推進室事務長挨拶の後、中村宗悦大東文化大学百年史編纂委員長（経済学部教授）より「大東文化大学における百年史編纂事業について」と題した講演が行われました。講演内容は大きく、「百年史編纂事業の起ち上げまで」「編纂方針の決定」「上巻の構成と刊行」から構成されました。中村委員長はアーカイブス組織と百年史編纂事業の「起ち上げ」の経緯について説明した後、大学ホームページ上に特別編纂サイト「継往開来」を開設し情報公開を進めるなど学内外への周知を図るとともに、いかにして本学百年史の特徴を表すべきか、従来の沿革史を補填するような内容となるべく編纂方針が決定されていった過程などについてを説明しました。講演会後半では、浅沼薫奈同編纂委員（東洋研究所特任准教授）より上巻に掲載した資料の選定と特徴、崩し文字のテキスト化作業の進め方などについて、上巻の具体的内容とともに説明を行いました。その後の活発な質疑応答の後、板橋校舎図書館内と歴史資料館展示室の見学会を行い、盛況のうちに閉会となりました。

おかげさまで本学100周年を迎えた年を締めくくるにふさわしい会となりました。ご参加いただいたみなさまにあらためて御礼申し上げます。



資料寄贈ご協力をお願い

大東アーカイブスでは、引き続き本学関係資料のご寄贈をお願いしております。学園沿革史に関わる資料がございましたら大東文化歴史資料館事務室（100周年記念事業推進室内）までご連絡いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

N e w s

百年史編纂の現場から

大東文化大学百年史編纂委員会副委員長

谷本 宗生 (歴史資料館運営委員・専任研究員)

今号も引き続き、私の担当として、もっか検討を続けている『大東文化大学百年史』中巻のなかから、第6章である東松山校舎の開校と板橋校舎の整備、第4節にあたる教育課程と大学院・研究所について、その要点をみなさんにご紹介したいと思います。

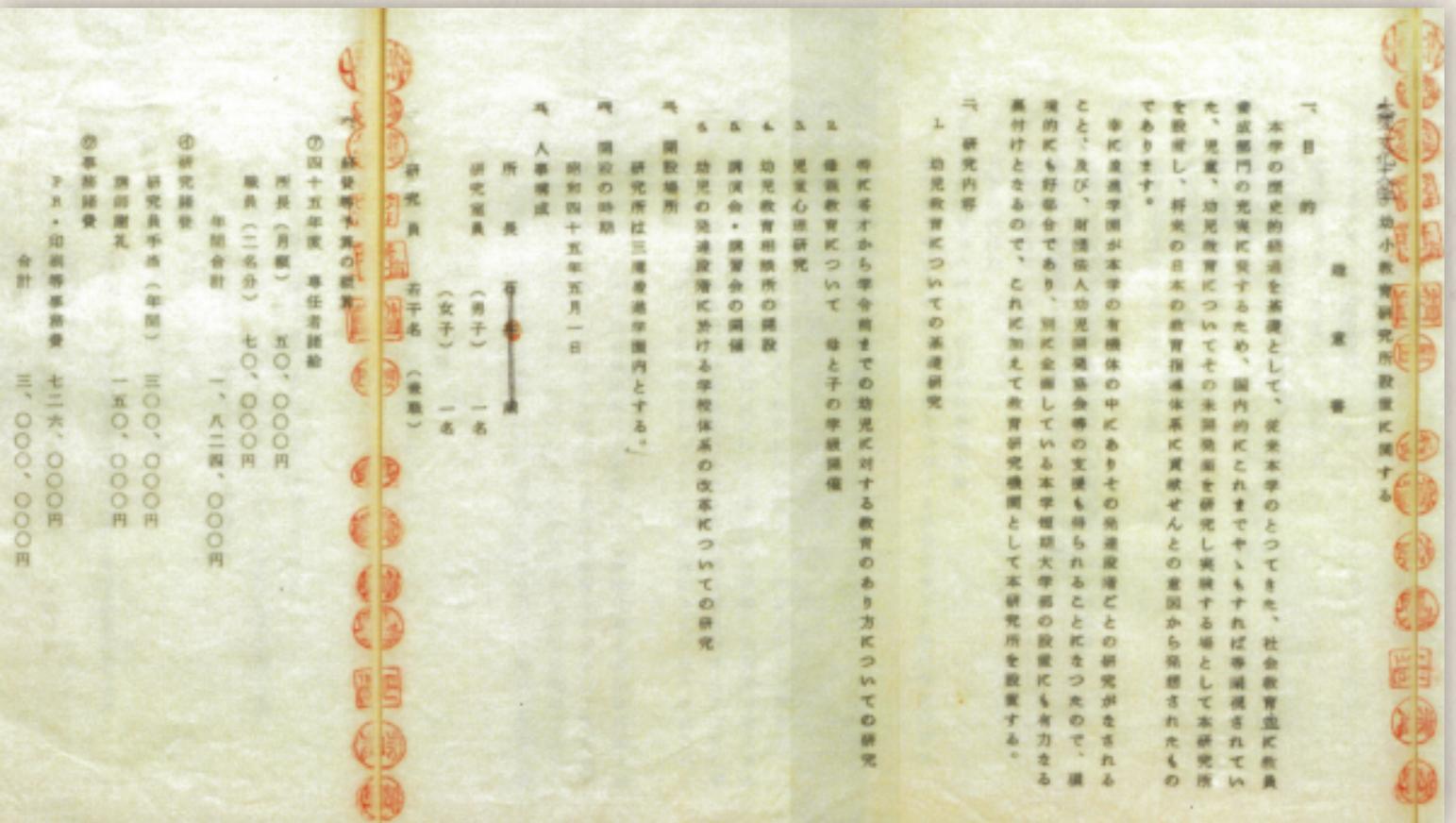
1960年代後半（昭和40年代）以降の本学における教学上の主要な動きとしては、67（昭和42）年に教養課程を東松山校舎に教養部として移設しました。1970（昭和45）年には、さらに円滑な運営をはかるために教養課程委員会と改称し、教養課程委員会委員長のもと一般教育科目・外国語科目・保健体育科目の3科目主任も置かれ、専任教員らによって組織運営されました。また67年には、文学部英米文学科を増設して、本学は2学部5学科としました。同年、大学院文学研究科（中国学専攻）博士課程を増設します。翌68（昭和43）年には、文学部外国語学科を増設して2学部6学科とし、72（昭和47）年に文学部外国語学科を改組し、外国語学部（中国語学科・英語学科）を開設しました。同72年には、文学部教育学科を増設して3学部8学科としました。同年、大学院に経済学研究科（経済学専攻）修士課程を開設して、文学研究科（日本文学専攻）博士課程も増設します。本学の創立50周年にあたる1973（昭和48）年には、法学部法律学科を開設して4学部9学科となりました。

一般教養課程は、全学部共通の1・2年次2ヵ年間の課程で、一般教育科目・外国語科目・保健体育科目の各科目群からなりたっています。本学の一般教育科目は、人文分野7科目（哲学・論理学・倫理学・文学・美術・地理学・歴史）、社会分野5科目（法学・経済学・心理学・政治学・社会学）、自然分野7科目（数学・統計学・物理学・化学・生物学・地学・自然科学概論）から構成されました。高等学校での修得した知識体験をもとに、より教養を高めて情操を豊かにし、透徹した認識と正確な判断をもとに民主社会に貢献し得る能力を養成することを目指しました。外国語科目（第一外国語・第二外国語）では、履修学生は学部学科ごとに開講され

ている2ヵ国言語以上（英語・中国語・仏語・独語・インドネシア語）を修得しなければならないとしました。保健体育科目では、理論（体育理論・保健衛生）と実技（一般体育系種目・格技体育系種目・シーズン体育系種目・特別体育系種目）から、必修科目として1・2年次生に課せられました。このほか外国人留学生課程では、一般教養課程履修負担の軽減をはかるため、日本語科目等（日本語話し方1～4・日本語構文（文法）・日本語理解1～2（講読）・日本語表現（作文）・日本語講義理解1～2・日本事情1～4）が開設され、上記の科目で代替しない一般教育科目についても、外国人留学生のみのクラス編成をはかり授業対応しました。

この時期の本学の研究所体制については、東洋研究所（1961年4月設置）は、東洋を中心とした哲学・思想・文学・政治・経済などの科学的研究を目的として設立されたものです。研究は、主として各班単位に基づく共同研究により進められ、その研究業績は定期刊行物である『東洋研究』（季刊）に発表することに加え、研究叢書などを積極的に刊行しました。なお『大東文化大学五十年史』（1973年）では、東洋研究所の活動展望として、より多くの新鋭研究者らが共同研究班へ参加することを働きかけながら、合同シンポジウムなどを定期的に行って研究交流を盛んにすることが望まれると指摘されています。

書道文化センター（1969年4月設置）は、本学の創立以来、書道の重要性を痛感し、学内の書道教科充実はもとより、対外的にも書道公開講座や全国書道展などを実施し、斯道発展のため幾多の成果を挙げてきました。その点をより強力に推進することに加え、これに関係する卒業生、在校生、全国の書道愛好者らの活動に対し、積極的に支援していくことを主眼としました。幼少教育研究所（1970年5月設置）は、本学の「社会教育並に教員養成部門の充実資する」ことを目的として、これまで等閑視されることもあった「児童、幼児教育についてのその未開発面を研究し実験する場」と位置付けられたものです（設置に関する趣意書）。同研究所は、文学部教育学科と表裏一体をなしながら、財団法人・幼児開発協会や日本幼年教育会、アメリカ人間能力開発協会なども緊密な連携を得て、もっとも効果ある幼少年期の教育法をもとめ調



大東文化大学幼小教育研究所設置に関する趣意書
 (1970年4月28日の理事会にて設置承認)

査研究を行いました。語学センター（1972年4月設置）は、本学学生や教職員の国際人的教養を高めるため、（一）海外の諸大学への研修または留学を希望する者に対するの相談に応じ、そのための渉外事務および国内諸機関との調整をはかる（二）外国人学生の本学への留学希望者に対し、本大学の事情説明及びその紹介を行う（三）教科外の語学研修希望者のための語学講習会を開く（四）本大学に在学中の外国人留学生に対して日本語の講習会を開く、といった事業を

実践しました。

このほか、本学法学部の設置（1973年4月）とともに法学部教員らの指導のもとで開設された、法律学ないし政治学に関する研究調査および資料収集を目的とする研究機関として、法学研究所（駿河台司法研究室、東松山司法研究室、板橋司法研究室、高島平司法研究室）がありました。当面の事業活動としては、司法試験または国家公務員試験を受験しようという学生らを対象とした特別研究指導を行うものでした。

大東アーカイブス活動記録

2023年10月～2024年3月

10.6	『大東文化大学百年史 上巻』謹呈
10.17	資料デジタル化にかかわる業務
10.24	辜鴻銘に関するインタビュー取材対応（中国映画撮影隊による来日調査）
10.26	WG会議
11.6	WG会議
12.9	『大東文化大学百年史 上巻』刊行記念講演会
12.18	紀要編集委員会
12.19	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（於：昭和大学）
12.21	『大東文化大学百年史 中巻』打ち合わせ（定例会）
12.28	資料デジタル化にかかわる業務
1.16	WG会議
1.25	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（於：NHK放送博物館）
1.26	同窓生より資料受領
2.9	年史編纂に関する調査対応
2.20	東松山キャンパス学務課所蔵資料選別・カビ取り作業
2.27	学務課所蔵資料移管
2.29	ニュースレター「Ex Oriente」vol.35発行
3.4	学務課所蔵資料追加移管
3.5	第二回百年史編纂委員会 第二回歴史資料館運営委員会
3.13	図書館所蔵資料確認
3.14	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会 （於：大東文化大学板橋キャンパス3号館）
3.29	『大東文化大学史研究紀要』第8号刊行

お知らせ

歴史資料館（大東アーカイブス）展示室において、
第27回企画展「入学試験の100年史—大東文化の学生募集—」を公開しております。
展示期間：2023（令和5）年9月15日～（終了日未定）
開室時間：毎週月～金曜日／9:00～17:00
展示場所：大東文化歴史資料館 展示室（板橋校舎2号館1階）
大学の休校日や入試日などに準じて閉室することがあります。
また、公開日を変更することがあります。詳しくは大学HPなどでご確認ください。

Ex Oriente | Daito Archives Newsletter Vol.36

発行：2024年7月31日
編集発行：大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）
〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10 大東文化大学徳丸研究棟3階
TEL 03(5399)7646 FAX 03(5399)7647
E-mail : archives@ic.daito.ac.jp
URL : <https://www.daito.ac.jp/100th/archives/>

『大東文化大学史研究紀要』 第9号 原稿募集

『大東文化大学史研究紀要』
第9号に掲載する原稿を募集
しています。投稿締切りは
2024年12月中旬を予定して
います。投稿を希望される方
は、2024年10月末日までに
こちらのメールアドレスへお知
らせください。ご質問等も随
時受け付けています。
エントリー（投稿）・そのほか
に関する問い合わせ先：
archives@ic.daito.ac.jp
「投稿規程」詳細について
は、百年史編纂サイト「継往
開来」（<https://www.daito.ac.jp/100th/bulletin/>）
でも公開していますので、ご
確認くださいようお願い申し
上げます。積極的なご投稿
をお待ちしています。



Ex Oriente

『Ex Oriente』（エクス・オリエンテ）は、かつて大東文化協会比較研究部が機関誌として1925（大正14）年4月に創刊した雑誌名でした。英仏独の3ヶ国語のうち、いずれかで執筆された論文のみを掲載し、欧米諸国へ向け、東洋文化に関する最先端の研究結果を知らせたいとの目的で発行された同誌は、当時わずか3号のみの発刊（1988～93年に東洋研究所が続号として4～6号を発刊）となりました。以降、幻となっていた雑誌名を大東アーカイブスで受け継ぐことといたしました。